

まえがき

書店の本棚には、日本の外交を論じた多くの優れた書籍が並んでいる。これらのほとんどは、歴史をベースとする戦前／戦後の日本外交「史」であったり、もしくは外交官の経験をベースとする日本外交「論」であったりする。日本外交史と日本外交論は重要である。歴史をふまえない外交の議論は、目の前の状況にとらわれすぎるあまり、短期的で場当たりの外交政策の展開を導くからだ。また、日本外交を論じるうえで、外交官や実務家の経験も大切である。外交の現場から生まれた知見は、日本外交の議論にリアリズムを吹き込むとともに、学術的な知見がユートピアニズムに陥ることを防止してくれるからだ。

とはいえ、日本外交に関する書籍のなかで、いまの日本が直面している課題そのものを中心的に取り扱っている学術書は少ない。たとえば、『外交青書』は政府の動きを知るのに重要な資料であるものの、それをさらに学術的な視点からひもとくとき、考える作業が必要となろう。そこで本書は、日本外交を学術的にとらえ直すべく、比較的若い世代の研究者たちが集まり、安全保障や経済の分野はもちろんのこと、文化の分野にも視野を広げて、いまの日本が直面している課題をできる限り多く取り扱っている。

本書は、①日本外交が抱えている問題とは何か、②なぜそれが問題なのか、③その問題を考えるためにはどのような専門知識が必要なのか、④その問題に対してどのような見解や立場があるのか、⑤それらの見解や立場を超えるためにはどうすればよいのか、といった点を意識している。それゆえ本書は、日本外交が抱えている問題に対して、その解決策を明確に提示していない。だが、解決策を考えるための知的基盤を提供していることに、本書の意義があると考えている。学部生や院生のみならず、外交の実務に携わる方々やNGOの方々、そして一般の方々にも手に取っていただければ幸いである。

2018年2月

佐藤 史郎